
老若男女 魁魅魍魎にボインちゃん 秘境温泉極楽浄土への旅～ポロリあるよ～

木綿箸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老若男女 魑魅魍魎にボインちゃん 秘境温泉極楽浄土への旅
ポロリあるよ~

【Zコード】

N4288BA

【作者名】

木綿箸

【あらすじ】

日本民族学者、イカス吸血鬼（無職男性）と、ロリフェイスボインちゃん（魔女っ子学生）による…ありがちな設定大量ぶち込み型温泉宿サスペンス&ホラー&アドヘンチャー&ラブ&ファンタジア。

いや

霧のかかつた道路に、つらなつた街灯をみてる。

田舎の山道。

消えかけた街灯。

パチパチ世話しなく瞬きをして…

あかりひとつをとっても時代のうつろいを感じる。

一昔前は、蠅燭の灯、油のランプだった。揺らぎのある、触れれば焼けてしまう熱いともしび。

この瞬きする街灯も、電球に触れれば熱いのだろうか。

コートのポケットから、LEDのペンライトと、バスの時刻表を取り出して、バスの到着時刻を確認した。
いま、バスにのってる。

自身、歳をとった気はしないが、関節も視力も、成長の段階ではなくて使いふるしていくんだなとおもう、時刻表の字が小さすぎてみえない。

バスの窓は結露してる。杉山の葉にもたくさんの夜露がしつとりおりてる。

葉に浮いた露のひとつを見れたあの頃、際限のない食欲に性欲に、ただ生きた感覚をたのしんでた。

いまは

ただねむりたい。

バスが二三、身震いをし
停まった。

「…お尻ごわごわ」

バス停を降りると、

腰が半分に折れまがつた老婆が蝙蝠傘を持ってまつっていた。
足元はゴム長で、畠仕事してそのまま迎えにきたような格好だった。
こちらを見て、目を離さない。バスを降りたのも、自分だけだし、
きょうとまる旅館の使いで間違いない。

「若い殿方が珍しい、お一人で？」

「こちらの史料館に、調べものを」

「ああ、郷土史の先生さんね、なんぎやね、こんな気候の悪い日に
老婆が歩きだしたので、うしろについて歩いた、旅館までは一百メ
ートルくらい」。

霧はたちこめているが、雨はふっていない。使いの婆さんは傘をさ
したまだ。

雨はふっていない。

傘を叩く水滴の音がたまにする。

コートが重い、たぶんいま鏡を見たら髪がもやもやになつてゐる。

「外人さん？」

婆さんがしゃべつた。

「ひいばあさんに、アジアンがひとりいたみたい

「そつかねそつかね」

容姿はね、

おめめは、みどりで、

肌の色は白めで、
髪は肩くらいの黒、
脚はながくて、鼻もたかくて、若いイギリス紳士みたいなかんじ。

ただ、ローマが政治を始めたくらいから生きてる。

吸血鬼。

に

畳みの和室にはいると、ぬれた山のにおい、床のきしむあと、すこしカビ臭い布団。

シーツだけ、あたらしく清潔で、ノリまでかけられていたから、それだけ目立つた。

20時。

「ばんごはんほんとに、いらんかね？」

「いらんて、たべてきたんだって」

バス停から旅館への道すがら何度もきかれ、なんどもこたえてる

「そんなやから、縦にひょろながなつて横にふとらんのよ」

婆さんに会つて、30分たつてないのに、この人から産まれた気がしてきた。

「ここから温泉でてるといいんだっけ

「川添の道くだつたらすぐよ」

「荷物もおいたし、いつてくるよ」

婆さんは、ばんごはんのことをじいながら無料貸出のお風呂セッテ
があるからと、部屋をでつた。

部屋におかれたちやぶ台の上に、手書きでかかれた温泉までの地図
がおいてあつた。

さつき、 ireでもらつたお茶をすすりながら。
地図をもつて、窓から外を。

旅館は渓谷の上にあつて、すぐそこに川の水流。旅行の下に、赤塗
りの板でできた橋のような、遊歩道が作られていてそれを行くと着
くらしこ。

朽ちかけた橋の足元にぼつぼつあかりがともっている。つづきが山林の中につながって消えた。その先も夜でも歩けないではないくらいにはしてあるのだろう。

赤い橋。橋の手摺りには、陰気に、木の枝がしだれかかっていて、川の方へ誘う痩せた女の腕にみえた。

このあたりは、銅山と温泉宿があるので一時は流行ったところだつた。いまはもう疲れて、使わなくなつた余計なものを山に還していく、途中なんだろう。

集落をみて、廃校になつた学校、猪や狸に荒らされた住人のいない家屋、朽ちて通行止めになつた山道…ばかりだった。

感傷もほどほどに、

浴衣に着替えると、

まだパンツと靴下なのに、婆さんはなんにもきにせず、ラップにつんだお起きりと、貸出お風呂セットをもつて戻ってきた。

橋の下は、黒い流れしかみえない。——口前に、雨がふつて水かさがましたのだらつ 穏やかではない。

「ラップのおにぎりを、片手おでだまをしながら、かぞえうたを歌おうとし、やめた。

あたたかいおにぎりが、すこし うれしい。

自分の頬や耳や胸。

冷たい。

吸血鬼の自分には体温がない。たちこめた霧よりも、岩よりも冷えてる。

足元を流れる黒い川とおなじで、ただ、からだの真ん中にあるポンプが冷えた血をまわして朽ちていくを待つ途中なのだ。

……。

携帯がなりだした。

「はー」

女の子からだつた。

「どした」

「どしたじゃないです！——今晩はレポートの発表があるから、研究課題がいなくなつたら困るつていいましたよね！——」

たいへんに怒つてる。

電波の先にいるのは、

14歳の魔女っ子学校バンパイアハンター科に通う ポインちゃん
(巨乳) 本名がはなちゃん。

「約束しましたのに！」

「いつしょの棺桶で眠つてくれたら、レポートに協力するつて約束
でしょ。約束破つたのはボインちゃん」

「こまどりです！？20分なら遅れてもだいじょうぶなのー！」

「こまね、極楽浄土温泉宿の旅～」

し

「旅行なんてきいてません！勝手にビニまりいかれたら契約もあつたもんじゃないです！」

穏やかではないかんじ。

魔女はいくつにかなると、故郷から離れ、一人暮らしの修業を（ジブリ、キキしかり）。使い魔を一匹はもつようになる。

黒猫や梟、蜘蛛、蝙蝠。魔力が未熟な内は、本人より下等なレベルの動物なんかと契約を結ぶ。

ビスケットを三枚、毎日あげるから、命令を聞いて・要領はこんなかんじ。

もちろん、魔女っ子学校のボインちゃんも、修業試験で、使い魔と契約を交わしてる。イカス吸血鬼と。

「ボインちゃんの魔力がもう少し強くなきゃ 契約の効力はでないんだよ」

ただ、イカス吸血鬼の方がまだまだ魔力が強いから、こちらが任意同行してるというかんじになつてる。

今回も、その使い魔をつかってなにかしらさせるような課題レポートなんだろうが、前回はレース網をしろとか、ぬかみそをつくれとかで…だいぶこりた。

「ほつきでくるといいよ、バスだと大変だったから」

「…………！」

「ねえ？ゆつくりできるし」

「…………」

電波が遠いのか切れちゃつた。

あちらも大変そうだが、こちらも用事があるし、
また旅館にもどつたらで。

今回、この寂れた銅山と温泉旅館にきてはいるのは、ただ羽を伸ばしたかったわけでない。一様、郷土史料を見に訪ねるのが目的だ。史料館とはいえ、ちいさな倉庫のついた寺だが。

三ヶ月前にアポをとつて明日住職と会つ予定になつていた。ただ連絡がここ一日とれてない。

考えながらたらたら歩いていたら、霧とはちがうあたたかい蒸気が頬に触れた。

橋の先が終わつたら、開けた先には岩場が。

天然温泉。

月がぼんやり空にあるし、暗くはあるが、人間と比べると断然夜目がきく。自分には充分な明るさだつた。

「これだとボインちゃんは怖がるだらうね」

森が近かつた。

瞼を閉じると、ひとつひとつのかいさな、土くれ、植物の葉や根、虫、獣、息きが重なつて、得体のしれない大きな生命のかたまりになつて揺れている。

その中に取り込まれて、自我を盗られるのではないか、そういうような感覚に襲われる。

怖がつてなきべそをかく、ボインちゃんを想像してクスリとした。

こういうときはね、たぶん、委ねてしまうしかない。自分よりも、おおきな流れを前に、あらがうのなら、大きな流れはもつと大きく避けがたい恐怖になる。

だから いつしょになつて揺れているしかない。

そうしてゐるのが 気持ちいい。
「さてお湯につかりますか」

蠅燭を思い浮かべた。

人の寿命に例えたのはつましい話しだとおもつ。

風に揺らいで灯る様は、危うくて人任せ。消えるも灯るも、ふく風
次第。

強い風にあらがつて炎を強くすれば、一時は生き逃れても、蠅は減
つて寿命が縮まる。

蠅が生命なのか、炎が生命なのか、炎の消えた先、暗闇が生命な
か。

これもまた、気ままな風の采配なのだろうナビ。

「あつたかあー」

手早く旅館の浴衣をぬいで、温泉につかつた。

吸血鬼には体温がない。冷めた死体のような身体が、ぬるくなつてく。

「いきかえるわー」

血がぬくもるとなんだか母をおもいだす。垂れてたけど乳房はおえきくて、あたたかだつた。

父は吸血鬼のバツイチ子持ち（自分）で、再婚した父の嫁、母は人間だつた。

父がいうには、前の妻は大柄だつたが、新しいのは小柄で、小回りもきくからいい、ということだつた。

自分は、このあたたかい母がすぎだつた。

大柄な母もすぎだつたが、吸血鬼だつたから体温がなかつた。このあたらしい人間の母の体温が、あたらしかつた。

母におぶわれて、思う。

もしかしたら、自分も、このまま、あたためつけたら、生き物になるのかもしれない。

いまの自分は、どちらかといえば野を走る“生き物”より、土くれに近い。

… ポシヤ

誰もいないお湯がはねる音がした。

はねたお湯の波紋が、よりより移動して、消えた。濁りのあるお湯なので、木の実が落ちてきたのか、なにか隠れたのかまではわからない。

波紋のはじまつあたりまで泳いだ。
なにもない。

このあたりでは、有名な昔話しがある。

人魚伝説だ。

海はない。四方、木々に囲まれた山奥だ。
だが、この村、海洋生物の化石ができる。

集落に伝わるはなしはこう。

銅山が開けたときより温泉が湧きでたときよつもつと、ここは海
だった。

この村にある湖は、山が競り上がるときに取り残された海のはしき
れ。

そのとき逃げ遅れた海の魚や貝はいまも湖で姿を変えて住んでいる。

海から切り離され、湖になつてすこしたつこう…そこに住む魚は夜
になると、たいそう大きな声で泣くようになった。

海が恋しく、塩気の少なくなつていいく、ここは地獄だ。

大きな声で泣いた。

これがまた、あまりにひどいわー。

村では、ひとり、はなし相手でも使わせようということになつた。使いは、はなし好きの女の子。うまれたころから腕のつけねより、手と足のない、達磨の女子にきまつた。

これを、魚はたいへんよろこんだ。この女の子供は、手足がなく、魚には、おなじ魚のようにみえたのだ。魚が泣くと、女の子は魚にはなした。

『滝を昇と竜になるんじや。竜はいいぞびこでもいける』。魚は慰められ、うれしくて、前よりも大きな声で泣くようになつた。うれしくて、うれしくて泣いた。

つづきは…

その涙が、温泉になつたとか。涙は、滝になつて、それを昇つて竜になつたとか。

最後、達磨の女の子はその魚と結ばれて人魚になつたといふのでしめくべられる。

そして、その人魚のミイラがこの村にあるとかないとか、夜中動くとかうごかないとか。

そんなで、それを見に今回ここにきた。

さつそく、旅館のお土産コーナーで、ミイラの人魚ストラップを買つてしまつた。

ボインちゃんのお土産にもうひとつ買つておへべきか。木彫りの人魚ミイラストラップ。女将手作り、悪魔払い済み。

仰向けにお湯に寝て全身浮かべながら、ビルのうつ考えていると、エンジン音が聞こえてきた。地面からではない。空から。

「哲郎さん……」

ボインちゃんだ。

ボインちゃんは、からだより大きなほうきにまたがって、頭の上まできた。

「よくわかつたね、顔しか浮いてないのに」

チョックのプリーツスカートでほうきにまたがつてのボインちゃんを、下から覗きこむような状態、だがハーフパンツをはいでいる。みえない。

「哲郎さんーはやくでないと、ふやけますよー。」
やわらかい、ラビットファーのようなストレーントの髪は、ツインテールで、べつこう飴の色してゐる。とっても長い。

上から覗きこんでるから、そのさきっぽがお湯につかりそう。

「ほうき、あたらしいエンジンつけた?かなり速くない?」
ボインちゃんのほうきは、通常魔力で、時速40キロあたり、速く飛べるようになにエンジンをくつつけてる。

「フォグワーズ推薦のエンジンです」

あんまり長時間ほつきこのつてると、股ずれおこすから、最近はみんなつけてるらしい。

ツインテールが水面をつぶつぶしてゐる。
わきわきちょを片方掘んで、引きずりこんでやつた。

わがう

「着入浴」

ほつき」と温泉に落つこひたボインちやんは、すいじへこやそつな顔をして。髪は引つ張られるは、濡れるは、それは怒るだろひ。どやねれるのをたのしみに待つてたら、ボインちやんほつきを拾つて、ぎらぎらぶ崖にでていつてしまつた。

「…あれ？あれ？」

下を向こじやふぞふこいつてしまひペ。

「あーもー」めんめんめんめんなむこー…」

「……」

怒りすぐいて相手にしてくれてない。

「もー」めんこい、「めんこい」

「……」

「はなちゃん泣いてる？」

「ないてない！」

背中をむけてふんふんしてゐのを追つかけた

「泣いてるでしょ？」

「ないてない！…」

「泣いてる？」

「ないてない！…」

「泣いてるつて」

「ついてこないで！」

顔を真つ赤にして怒つてるから、なんかすごく悪いことした気がしてきた。ふりかえらない、彼女の腕を掴んで顔をみると、もつと困つた顔をして耳まで真つ赤になつた。

シャツが濡れてブラが透けてるのが恥ずかしいのだろつか。

「いめん」

田をみて謝るのが一番いい。

「『めんね』」

「おちんちん ぶらぶらしないで……」

-あこむん！-

温泉で、素っ裸で追つかけまわしてた。

浴衣に着替えたボインちゃんは、二丁の「ぼたん鍋」をつっこむ。機嫌なおつたみたい。

あのあと、旅館に戻り、

宿泊客がひとり増えたのを伝えたら、女将さんがこの山で捕れる猪を、鍋にしてくれたのだ。女将は、バス停まで迎えにきてくれた婆さん。

「おいし?」

「うん」

「うつりて、ひどがおいしそうに食べてるのを見るのが一番いい。」

「ひとつくらい?」

「生肉の方をもうひとつよ」

一枚だけ、まだ鍋にいれない猪の肉をほづぼつた。食卓をいつしょに囲んで、相手がなにも食べないのでおもしろくないだらうから。

「おいしいね」基本、食欲がない訳ではないが、食べない。あたたかい生き物の血が、スーパーでウ、イダーインゼリーみたいに売っていたら飲むが、そうはいかないから。

殺生をその場で見るのが嫌だ。なまぬることをこつていると思つが、もう充分だ。

人間だつて、牛肉や鶏肉を、その場で締め殺して食べるのが常だつたら、おなじ量を食べるにしても、もつと違つ食べ方をするだらう。パックに詰めて見ないで吃えるほど楽なものはない。

じゅうじ けごじゅ

食べないことに關して、ボインちゃんはとこうと…

飼い主として餌をやらなくてはいけない責任感があるよつで。たぶんペット感覚。

それでいて、彼女はバンパイアハンターでもある訳で、なにか殺させる訳にもゆかず、そのへん葛藤があるらしに。

吸血鬼が血液以外に、なにを食べるかよくわからない、だからって、ペットショップでイグアナのフードやらカブトムシのゼリー（樹液）を買ってくれたりもする。

「ねえ、レポートどうだつたの？」

「使い魔がいないから、お家でやる課題もらいました」「へえ？」

「からまつたチヨーンのネックレスを魔法で戻すの」ボインちゃんは、濡れた制服といつしょに干してある肩掛けポーチから、いそいそと課題を取り出して問題の物をみせてくれた。拳だいにからまつたネックレスのチヨーンを。

「わあ…」

「提出は一週間後です…」

「…これは、

…なんていうか…

…いかつい

ねえ…」

今晚から始めないと終わらぬさうだ。

この課題といつのも、ボインちゃんの訓練になつてゐる。使い魔を命令する時間の長さを伸ばす訓練。命令をこなすのに時間がかかるほど、魔女は魔力が必要になる。命令に、使い魔をしばりつけてい

ないといけないから。

「…哲郎はね、

この幼い魔女をみているのがすきだ。
それが、魔女の魔力だというのなら…
いたしかたない…

いたしかたない！わけがないだろう！

そんなもの先生に返してきなさい！一筆そえたげるから
「ここいつまでいるんですか？」

魔女は聞いていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4288ba/>

老若男女 魔魅魍魎にボインちゃん 秘境温泉極楽浄土への旅～ポロリあるよ～

2012年1月14日21時47分発行